令和６年度

運営に関する計画
【最終評価】

大阪市立瓜破西中学校

令和7年2月

瓜破西中学校グランドデザイン

令和5年度～令和8年度

大阪市立瓜破西中学校

教育全体構想図

校訓 希望あれ，こころあれ，学びあれ

〈希望あれ〉望ましい未来を観る。自主、創造の精神を養い、明るい人になろう。
〈こころあれ〉まごころを通じる。自他を尊重し、正しい判断力と責任を持って行動できる人になろう。
〈学びあれ〉学びの中につとめはげむ姿をうつす。真理を求め、努力を怠らず、すすんで他と協力できる人になろう。

学校教育目標

一人ひとりの生徒に、活きて働く学力を身につけさせ、これからの国際社会を生き抜くための力を育成することをめざし、その根本たる人権尊重の精神を具現化できる豊かな人間性をはぐくむことを目標とする。

めざす学校像

明日も行きたくなる学校
トイレのきれいな学校
来訪者に感動を与える学校

めざす生徒像

自他の尊重を行動で示せる生徒
自らの力で考え発信できる生徒
心も体もはつらつとした生徒

めざす教職員像

生徒の思いや行動を受け止められる教職員
自ら学ぶ姿勢の教職員
助け合い支えあう教職員

令和6年度重点教育目標

不登校生徒と保健室来室生徒(心因性)の減少をめざす。
［指標：一か月の欠席者及び保健室来室者数(心因性)を昨年度の同月より減少させる］

- カウンセリングマインドに基づいた生徒対応を実践する。継続
- 生徒自らが発案計画実践できる取り組みを計画する。継続
- 校内の美化活動に重点的に取り組む。継続
- 「今週のできごと」を継続実施する。継続
- 可能な限り、給食を実施する。継続
- ホームページ掲載記事を充実させる。

生徒がより良い学校生活が送れるよう、教師力向上(授業力・指導力)をめざす。

- 学期に1回ずつ、それぞれ1つの学年集団が研究授業を実践する【年間3回】。継続
- 時期相応なICT活用技術の研修を年間を通じて3回おこなう。
- 【≪瓜西中の未来を語ろう≫会】を発足させ、教職員のレベルアップを図る。

生徒一人ひとりの学力の向上をめざした、授業実践に取り組む。

- 1･3年生の朝学習を個々に応じた、デジタルドリルナビマ･教科書音読･NIEドリル･コグトレで実施する。継続
- 2年生の朝学習において、朝日デジタル新聞を活用した《視写》を実施可能な曜日でおこなう。
- 国語･数学･英語における習熟度別分割授業を充実させ、特に基礎コースのレベルアップを図る。継続
- 全教科を通じ、授業の振り返りを授業ごと(単元もしくは教材ごと)に150字程度の作文を書かせる。継続
- 読解力･表現力のレベルアップをめざした授業実践(音読,ﾍﾟｱ&ｸﾞﾙｰﾌﾟ学習,ﾌﾟﾚｾﾞﾝ,探求型授業)をおこなう。継続
  ［上記の効果検証のために、RSTを第1学年の初期と第2学年の後期に実施し、その成績を比較検討する］

学校総体としての校内の取り組みや行事を実施し、体系化･系統化した組織を構築する。

- 3年間を見通して作成した人権，障害者問題，在日外国人，キャリア教育，の年間計画を令和8年度まで一貫した計画で実施する。
- 3年間を見通して作成した学年行事の年間計画を令和8年度まで一貫した計画で実施する。
- 作成した運動会･文化祭における年間計画を令和8年度まで一貫したプログラムで実施する。

上記計画を実施する中で、大きな課題が見られた場合は変更もあり得る。

幼小中連携及び地域連携を充実させることによって、地域全体で生徒を育てる感覚を醸成する。

- 瓜破北幼稚園児に対する【読み聞かせ】ボランティアに取り組む。
- 瓜破北幼稚園児を運動会等に招き、交流を深める。継続
- 校区両小学校への出前授業と両小学校を招いての部活動体験を実施する。継続
- 地域人材を最大限活用し、高齢者介護学習･地域防災学習などのゲストティーチャーを積極的にお招きする。また、校内植栽ボランティアなどを積極的に招聘する。継続

（様式１）

大阪市立瓜破西中学校 令和6年度 運営に関する計画・自己評価(総括シート)

※はじめに※

令和5年度に『大阪市立瓜破西中学校教育全体構想図（瓜破西中学校グランドデザイン）』【前頁を参照】を策定した。そのため、令和4年度から7年度までの中期目標を変更し、概ね令和5年度から8年度までの目標として改めて設定する。

１．学校運営の中期目標

現状と課題

落ち着いた状態で日々の教育活動は展開できている。教職員も授業研究に余念がなく、行事や特別活動の取り組みに対しても熱心である。また、家庭訪問等の保護者対応にも努めている。ただし、次の点において課題がある。

ア）一部に、日常的な校則違反及び日常生活が乱れている生徒がみられる。保護者の協力も得にくく、指導の効果もなく改善の見通しが立たない。

イ）不登校生徒が多く、対応に苦慮している。令和5年度の年間 30 日以上欠席者は、1年10名，2年14名，3年16名の合計40名で全体の10％を超える。中には、100％欠席で、入学式から登校していない生徒も存在する。

ウ）各種テストにおける得点力に多くの課題がみられる。令和5年度の全国学力学習状況調査の平均正答率では、全国 55.5％，大阪府 54.3％に対して本校は47.7％であった。チャレンジテスト（チャレンジテストplusを含む）の平均点では以下のような結果となった。

	1年		2年		3年	
	府（市）	本校	府	本校	府	本校
国語	60.8	56.6	66.8	63.9	62.1	59.0
社会	56.0	57.5	54.1	51.2	54.7	52.5
数学	54.7	53.6	52.2	54.5	52.2	52.4
理科	62.2	54.9	40.3	36.7	47.6	45.6
英語	64.1	59.0	57.1	56.0	54.2	50.2

エ）校内体制として、生徒が主体的に取り組める活動になっているとは言い難く、まじめには取り組もうとするものの“指示を受けてから動く”といった生徒が多くを占める。

オ）PTAとの連携は活発とまでは言い難い。

中期目標

【安全・安心な教育の推進】

◎不登校生徒の減少をめざし、令和8年度末には6％未満までとする。

【未来を切り拓く学力・体力の向上】

◎学力向上をめざし、令和8年度には【全国学力学習状況調査】における各教科の得点を全国と、【チャレンジテスト】では各教科の得点を大阪府と、【チャレンジテスト plus】では各教科の得点を大阪市と、同じレベルにする。

【学びを支える教育環境の充実】

◎各教科の授業において、ICT機器を活用した授業を令和8年度には年間80％以上にする。

◎「教員の時間外勤務時間の状況について」中、「3　貴校教員の時間外勤務時間上限基準の達成率」の「基準1」を、令和8年度1月度には45％以上にする。

2　中期目標の達成に向けた年度目標（全市共通目標を含む）

【安全・安心な教育の推進】

◎年度末の校内調査における「学校に行くのは楽しいと思いますか」に対して、肯定的に回答する生徒の割合を75％以上にする。

◎年度末の校内調査における「自分には、よいところがあると思いますか」に対して、肯定的に回答する生徒の割合を80％以上にする。

【未来を切り拓く学力・体力の向上】

◎中学生チャレンジテストにおける国語の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より4ポイント減少させる。

◎中学生チャレンジテストにおける数学の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より4ポイント減少させる。

【学びを支える教育環境の充実】

◎授業日において、生徒の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50％以上にする。〔ただし、事務局が定める学校行事等ICT活用が適さない日を除く〕

◎年次休暇を10日以上取得する教職員の割合を60％以上にする。

３　本年度の自己評価結果の総括

【安全・安心な教育の推進】

◎不登校生徒を減少させ、令和8年度末には6％未満とすることを目標としているが、年間30日以上欠席者が現時点で14％であり、昨年度より増えているのが現状である。学校の努力だけでは達成できない目標ではあるが、今後も引き続き家庭や関係諸機関の協力を得ながら、取り組みを進めたい。

◎学校評価アンケート（生徒）における「学校に行くのは楽しい」の項目で肯定的な回答をした生徒の割合は82％（目標75％）となり、数値目標は達成できている。ただ、この数値はアンケートが回収できた生徒の中での割合なので、この数値をもって学校の目標が達成できたと判断するのは時期尚早であると考える。

◎生徒のアンケートの結果を見ると、「先生は自分たちの思いを受け止めてくれる」（85％）、「自分はどんなことにも最後まであきらめずに頑張っている」（75％）、「自分は学校のきまりやルールを守っている」（90％）、「自分には悩み事などを相談できる友だちがいる」（86％）など、自己肯定感にかかわるような項目で高い割合の生徒が肯定的回答をしていることから、生徒たちが安心して学校生活を送っている様子がうかがえる。一定の評価をしてもよいと考える。

【未来を切り拓く学力・体力の向上】

◎チャレンジテスト（1・2 年）の結果がまだわからないが、全校の傾向を見ると、全国や大阪府の平均を下回ることが多く、学力面の課題は多いと考えている。

◎生徒のアンケート結果を見ると、「学校の授業はわかりやすい」（87％）、「先生は教え方をいろいろ工夫してくれている」（89％）、「国数英のTT授業はわかりやすい」（81～88％）など、授業や学習に対して決して後ろ向きになっているわけではない様子がわかる。テストで結果を出すためには、授業だけではなく、家庭学習や自学自習が不可欠である。生徒の前向きな気持ちを保ちながら、家庭学習・自学自習の習慣づけなどをして各テストでも結果を残せるように導きたい。

◎中学2年生に対する「全国体力・運動能力調査」の結果では、すべての種目で全国平均・大阪市平均を上回る結果を残している。

【学びを支える教育環境の充実】

◎「生徒の8割以上が端末を活用した日数」を目標達成の度合いを測る材料にしたが、8割を超えたのは、わずか1日（双方向オンライン学活をおこなった9月12日）だけであった。目標そのものを考え直す必要があると思われる。ただ、学校生活のさまざまな場面で端末を使う機会は増えており、PCが“当たり前の道具”として生徒・教職員に認識されているのは間違いなさそうである。

◎年次休暇を 10 日以上取得する教職員の割合も目標の60％には遠く及ばず、1月末時点で44％である。ただ、時間外勤務時間の量は昨年度より少なくなっている（「基準1」は44％）。年次休暇以外の振替休日を取得する、早く退勤するように意識するなど、教職員の間でも“働き方”や“休養”に対して少しずつ意識が高まっていると思われる。

（様式２）

大阪市立瓜破西中学校 令和6年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準	A：目標を上回って達成した	B：目標どおりに達成した
	C：取り組んだが目標を達成できなかった	D：ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
【安全・安心な教育の推進】 ◎年度末の校内調査における「学校に行くのは楽しいと思いますか」に対して、肯定的に回答する生徒の割合を75％以上にする。 ◎年度末の校内調査における「自分には、よいところがあると思いますか」に対して、肯定的に回答する生徒の割合を80％以上にする。	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
取組内容①【１ 安全・安心な教育環境の実現】 ◎カウンセリングマインドに基づいた生徒対応を実践する。	B
取組内容②【１ 安全・安心な教育環境の実現】 ◎生徒自らが発案計画実践できる取り組みを計画する。	B
取組内容③【１ 安全・安心な教育環境の実現】 ◎「今週のできごと」を継続実施する。	B
≪①②③の共通指標≫ 一か月の欠席者数及び保健室来室者数（心因性）を昨年度の同月より減少させる。	B

年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析
◎日ごろから、多くの教員で常に生徒の様子を見守り、何かあったときには生徒の声を丁寧に聞き取って対応することを心がけている。 ◎毎週末の「今週のできごと」、毎日の「心の天気」のコメントなど、いろんな相談機能を活用して、いじめや悩みごとなどの早期発見に努めている。 ◎保健室の来室者数（心因性）は、4・5・10月が増加して、6・7・8・9月は減少している。全体としての割合は微増している。多くの教員で生徒の様子を見守り、丁寧に話を聞き続けることで、来室者数（心因性）の減少を目指していきたい。 ◎昨年度と今年度の欠席者数を比較すると、特に 6 月以降で大幅に減少している。母集団が変わっているので単純には比べられないが、本校の教育活動のひとつの成果として受け止めてよいと考えている。

◎朝の挨拶運動など、生徒が主体となって活動をおこなっている。ただ、主体となる生徒が限られているので、今後は少しずつ広げていきたい。
◎3年生の修学旅行に際しては、生徒が主体となって修学旅行実行委員会を発足させ、修学旅行内のルールを決めたり、学年レクリエーションの企画運営に携わったりするなど、有意義な修学旅行の実現に向けて積極的に活動した。

次年度への改善点

◎「本年度の自己評価結果の総括」(p.4)にも書いたように、学校評価アンケート(生徒)の結果から、同級生や教員と一定の信頼関係を築きながら、学校生活を前向きに送っている生徒がたくさんいることがうかがえる。「安心・安全な教育の推進」という意味では、一定の評価をしてもよいと考えている。
◎すでに不登校の状態である生徒を継続して登校できるようにするのは大変難しい課題である。まずは、生徒や保護者の思いと真摯に向き合うことで、学校との信頼関係を築き、「登校はできないけど、学校は何かと相談に乗ってくれる(だから相談したい)」という状態にもっていくことを目指したい。そして、欠席が目立ってきた(これから不登校になるかもしれない)生徒へ早期に対応し、新しい不登校生徒を増やさないための取り組みを推し進めたい。
◎毎日の「心の天気」、毎週末の「今週のできごと」など、生徒が教員に何かを訴える機会は増えているし、実際それによって発見できた事象もある。ただ、それでもきちんと取り組もうとしない生徒がいるのも事実である。教員は、「それらにきちんと取り組ませる努力をする(精度を高める)」ことが「生徒の声を聴こうと努力する」ことであると自覚する必要がある。改善すべき点は少なくないと思われる。
◎保健室の来室者数(心因性)は、月によって増減はあるものの、全体としては減っているので、数値の目標は達成できている。ただ、単に「授業がしんどい、教室を抜け出したい」程度の来室者数は減らすべきであるが、何らかの心の不調を教員に訴えようという生徒の動きは必ずしも減らせばよいというものではない。教員は「保健室の来室者数を減少させる」ことと、「授業で活躍できる場をつくって教室につなぎ止める」ことの両面から生徒に迫る必要がある。
◎生徒議会が情報交換の場として機能して、1・2年生で「授業態度改善キャンペーン」が展開された。クラスや学年全体が同じ目標に向かって努力をする取り組みが、生徒が主体となって実践されたことに大きな意義がある。問題行動を繰り返す一部の生徒に振り回されることなく、クラス・学年集団を正しく育てる取り組みを、正しい問題意識をもった生徒の手で今後ますます強力に推し進める必要がある。教員は、静かにしている生徒が考えていること、思っていることをきちんと把握し、そういった取り組みをリードする存在となるべきである。
◎教員が「カウンセリングマインドに基づいた生徒対応を実践する」(取組内容①)ことで、生徒は安心して教員に自分を出せるようになり、そのことが本校を「安全・安心な学校」に近づける。一方、生徒が安心して自分を出せるためには、周りの生徒の態度も重要であることは言うまでもない。「真面目に取り組む・一生懸命に努力する・失敗する」といったことが冷やかされたり笑われたりするような集団であれば安心して自分を出すことなどできない。「真面目に取り組むのはかっこいいことだ」、「一生懸命に努力することは正しいことだ」、「失敗することは恥ずかしいことではない」という当たり前の価値観をもったクラス・学年集団を育てることが、「安全・安心な教育の推進」において必要不可欠な土台となる。

（様式２）

大阪市立瓜破西中学校 令和6年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準	A：目標を上回って達成した	B：目標どおりに達成した
	C：取り組んだが目標を達成できなかった	D：ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
【未来を切り拓く学力・体力の向上】 ◎中学生チャレンジテストにおける国語の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より4ポイント減少させる。 ◎中学生チャレンジテストにおける数学の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より 4ポイント減少させる。	C

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
取組内容①【４ 誰一人取り残さない学力の向上】 ◎国語・数学・英語における習熟度別分割授業を充実させ、特に基礎コースのレベルアップを図る。	C
取組内容②【４ 誰一人取り残さない学力の向上】 ◎全教科を通じて授業の振り返りを授業ごと（単元ごともしくは1教材ごと）に150字程度の作文を書かせることによって、書く力を伸ばす。	B
取組内容③【４ 誰一人取り残さない学力の向上】 ◎読解力・表現力の向上をめざした授業実践（音読，ペア＆グループ学習，プレゼン，探求型学習）をおこなう。 **指標**：RST（リーディングスキルテスト）を第1学年の初期と第2学年の後期に実施し、その成績を向上させる。	B
≪①②③の共通指標≫ ◎中学生チャレンジテストにおける国語の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より4ポイント減少させる。 ◎中学生チャレンジテストにおける数学の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より4ポイント減少させる。	C

年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析
◎国語、数学、英語の分割授業については、国語科は単純分割授業をおこなった。数学科と英語科では教員の欠員があり、分割授業をおこなうには厳しい状況であった。長期間欠員が出たままの状況である英語科は分割授業がおこなえていない。数学科は、教員の補充があったときに習熟度別分割授業をおこなった。 ◎授業の振り返りとして150字程度の文章を書かせる取り組みはおこなっているが、そのことで生徒たちの書く力が伸びたかどうかを判断するためには、また別の検証が必要である。 ◎教科（教材）の特性にもよるが、音読、ペア＆グループ学習、プレゼン、探求型学習などの実践を積極的におこなっている。 ◎1年生は7月にRSTを実施した。2年生は3学期に実施する予定である。 ◎チャレンジテストは、3年生（9月実施）はすでに結果が出ているものの、1・2年生が未実施（1月実施）なので、年度末にはその結果も踏まえて年度目標の達成状況を判断する予定である。
次年度への改善点
◎上にも書いたように、今年度は教員の欠員が多く、特に数学・英語において、十分な分割授業が展開できず、限られた時間数のみの実施となった。欠員のなかった国語は単純分割授業と習熟度別分割授業を実施することができた。ただ、学校評価アンケート（生徒）では、「少人数授業・TT授業はわかりやすい」という項目で、81～88％の生徒が肯定的回答をしていることから、生徒たちが少人数の分割授業を求めていることは明らかである。来年度は正規の人員が配置された中、生徒・教員ともに満足のできる分割授業を展開したい。 ◎150字程度の文章で授業（単元ごともしくは教材ごと）を振り返るということを継続してきた。書く力を伸ばすためというより、はじめは「気持ちを言語化する」ことによって、頭の中でバラバラの状態にある学びを整理するという効果が期待される。自分の学び・自分の気持ちが整理されることの気持ちよさが実感できると、書くことが苦ではなくなり、やがて楽しくなり、結果として書く力が伸びることにもつながる。そういう効果を意識しながら、来年度も取り組みを続けたい。 ◎音読、ペア＆グループ学習、プレゼン、探求型学習の実践は、それぞれの教科の授業だけでなく、総合や特活の取り組みの中でも積極的におこなった。これらの取り組みは来年度から全市で本格的に実施される「総合的読解力」の取り組みにもつながるものである。引き続き、取り組んでいきたい。 ◎チャレンジテスト（1・2年）の結果は現時点ではまだ届いていないが、「学力に課題のある生徒の割合を同一母集団で4ポイント減少させる」というのは厳しそうだと思われる。学力に課題のある生徒は多いが、「本年度の自己評価結果の総括」（p.4）にも書いたように、学校生活や授業には前向きな生徒も多い。引き続き、学力向上の取り組みを継続させていきたい。 ◎リーディングスキルテストは第1学年の初期と、第2学年の後期におこなっているが、現在の2年生が3学期に2回目のテストをおこない、初めて成績が比較できるようになった。その結果、項目別では上がっているものはあったものの、全体としての成績はわずかに下がっていた。指導の方針を見直すきっかけとしたい。

（様式２）

大阪市立瓜破西中学校 令和6年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準	A：目標を上回って達成した	B：目標どおりに達成した
	C：取り組んだが目標を達成できなかった	D：ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
【学びを支える教育環境の充実】 ◎授業日において、生徒の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50％以上にする。〔ただし、事務局が定める学校行事等ICT活用が適さない日を除く〕 ◎年次休暇を10日以上取得する教職員の割合を60％以上にする。	**C**

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
取組内容①【６ 教育 DX(ﾃﾞｼﾞﾀﾙﾄﾗﾝｽﾌｫｰﾒｰｼｮﾝ)の推進】 ◎時期相応なICT活用技術の研修会を年間を通じて3回おこなう。 **指標**：授業日において、生徒の8割以上が学習者用端末を活用した日数を、年間授業日の50％以上にする。〔ただし、事務局が定める学校行事等ICT活用が適さない日を除く〕	**C**
取組内容②【７ 人材の確保・育成としなやかな組織づくり】 ◎退勤時刻17：30までの教職員用「ゆとりの日」を月に4回確保する。 **指標**：年次休暇を10日以上取得する教職員の割合を60％以上にする。	**C**

年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析
◎ICTの研修はこれまで2回おこなった（10月末時点）。3学期に3回目を実施する予定である。生徒の8割以上が学習者用端末を活用した日数は、現時点で1日（双方向オンライン学活をおこなった9月12日）だけである。11月現在、学習者用端末の利用率は、ほとんどの日が6～7割程度である。昨年度は4割程度だったので、端末を利用する機会が増えているのは間違いないが、年度目標の達成には程遠いのが現実である。 ◎「ゆとりの日」は月4回の設定をおこなっているが、そのことが必ずしも退勤時刻を早めることにはつながっていない現状がある。10日以上の年次休暇を取得した教員は現時点ではまだ18．8％である（10月末時点）。教員の欠員が増えたことで、他の教職員が簡単に「休む」と言い出しにくくなっていることもマイナスの要因になっていると思われる。

次年度への改善点
◎生徒が学習者用端末を使う機会を増やすことを目指して、まずは、すぐに取り組める「心の天気」の入力を朝の学活等で毎日おこなうようにした。作業自体は簡単なものであるが、なかなか定着しておらず、学校全体の実施率は60～70％であった。「心の天気」は、1人1台端末さえあれば、朝の学活以外の時間でもできるし、欠席者は家でもできるものである。「遅刻・欠席だ（朝の学活時に教室にいなかった）からできない」というものではないので、意識すれば比較的簡単に達成できるはずのものである。また、前述したように、「心の天気」は生徒の心の様子をうかがえるチャンスともなりうるものである。しかし、教員側にその意識がないとうまく機能しない。簡単な作業であるからこそ、「簡単な作業をきちんとやらせきる」という意味で、来年度はその取り組む姿勢をこそ改善しなければならない。 ◎ICTに関する研修は、今年度は3回目を3月24日（月）におこなう予定である。本年度の目標とする回数は満たすことができそうである。ただ、研修についていえば、回数より、その研修によって教員の意識にどのような変容が見られたかが重要である。そのことを肝に銘じて、来年度も研鑽を積む必要がある。私たちがもっとも忘れてはならないのは、生徒が端末を使って取り組む活動を、教科の授業等で設定することである。生徒が“当たり前の道具”として端末を使えるように、引き続き、各教科・学年で工夫をする必要がある。 ◎教職員の「ゆとりの日」は基本的には月4回（週1回）の設定をしているので、回数の目標は満たしているが、教職員の退勤時間はそれほど早まっていない。1人ひとりは仕事の段取りを考え直す必要が、学校・学年は仕事の分担を考え直す必要がそれぞれあると思われる。 ◎10 日以上の年次休暇を取得した教員の割合は、1月末時点で44％にまで増えたが、目標の60％には達成していない。ただ、この結果は、年次休暇より代休（振替休日）などを優先的に取得している結果であるとも考えられるので、引き続き、時間外勤務時間を減らせるように取り組んでいきたい。 ◎時間外勤務時間について総括すると、本校の平均時間外勤務時間は昨年度と比較して、ひと月あたりで6時間程度減っている（39時間→33時間）。また、上限基準の達成率も大きく伸びている（【基準1】37％→44％ 【基準2】77％→82％）。勤務時間に対する教職員の意識は着実に変わっていると思われる。